
マイ フィールド ~並列の境界~

木々之 みどり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マイ フィールド ～並列の境界～

【Nコード】

N2414BA

【作者名】

木々之 みどり

【あらすじ】

処女作です。未熟者ですがよろしく願います。

投稿方式に付いてですがバラバラに気分で投稿していきます。どうかでひとまとめにしたいと思います。

私は応援されると頑張れるタチです。

始まりのプロローグと1章冒頭（前書き）

ちよつと女っぽい名前にコンプレックスの有る主人公「来ヶ谷 静」と幼馴染との異能系ファンタジーコメディになります。

「小説家になるう」さんで異世界転生モノに飽きてしまつて悩んだら、自分で書けばいいじゃないって書き始めました。

最後の方はシリアスにします。「残酷な表現」もバンバンは入れる予定ですのでR15つけときました。

始まりのプロローグと1章冒頭

プロローグ（名前）

来ヶ谷 静　それが俺の名前だ。

何とも女っぽい名前だろうか、おれは男だ。

男ならもっとカッコイイ名前が欲しかった。俺はそう思った。

小学校低学年の頃まで俺は女の子として育てられた。

俺に名前を付けた母親は俺にスカートを穿かせ、リボンを飾り付け化粧をさせた。

ハッキリ言おう、その頃の俺は無茶苦茶可愛い女の子だった。

その頃のアルバムを俺は、こっそり母親の部屋から持ち出し、俺の部屋に嚴重に隠した。

そこに写っているのは可愛らしい物ばかり。

クルッと回れば背後に花が舞い。背景可愛く星やらハートマークが輝きその可愛さを引き立たせる。

「死のう」俺はそのアルバムを開くたびに鬱症を発病してしまうため見えないようにしている。

母親の部屋から持ち出したのは、母が誰かれ構わず客人が来ては嬉しそうにアルバムを持ち出しては「見てみて」と少女のような笑顔で見せびらかす為だ。

何度も言うが俺は男だ。男ならもっとワイルドで男らしくてカッコいい名前が数多く有るはずだ。

そんなカツコイイ名前が俺に付いていれば通学路の桜並木を歩きながら鬱になることもなかった。俺はそう思う。

そんな事を考えながら来ヶ谷 静こと俺は通学路を歩くのだった。

1章 走馬マウソウ

俺には少し変わった力があった。

力といってもそれは誰しも持っているもの。『反射神経』だ。

厳密に言うところ一般的に言われる「反射神経」や「運動神経」は実際に存在する神経ではない。

運動が得意だとか、スポーツや競技に優れた才能を持つ人によく使われる造語だ。

俺はこの反射神経と呼ばれるものが少しだけ他の人より優れていた。具体的には自身に危険が迫った時や、驚いた時に起こる。

例えば自分の顔面に野球のボールが飛んできたとしよう。

その瞬間、俺以外の物の時間はまるでビデオのスロー再生のような感じになる。

一種の「走馬灯」に似ている。自身が死を認識した瞬間、今まで生きてきたところが高速で頭の中で再生される。アレのことだ。

脳は普段全体の数パーセンとしか動いておらず「死の瞬間」そのリミッターが外れ、脳はフル回転する。簡単にいえばそれが「走馬灯」

の正体だ。

俺の他の人より少しだけ変わった力はその「走馬灯」の状態になりやすい事だ。

俺は高校初めての球技大会でソフトボールを観戦していた。

投手の投げたボールはバッターのバットに浅く当たり、俺の頭目掛けて飛んできた。

俺は飛んでくるボールに危険を感じ、反射神経をフル回転させた。

その瞬間、アレほど高速にコチラに飛んできたボールは、ゆっくりと動き周りからは音が消えた。

俺はゆっくりと考えた。今まさに俺の頭はフル回転しているのだから、ゆっくりと言うのは矛盾しているが焦ってはいけない。

今俺の目の前から、ゆっくりとアクビが出そうなほどの遅さで、ボールは俺の頭に向かって飛んできている。

こんな遅いものが当たっても痛くも痒くもなさそうだが。実際には高速で動いていて、当たればただでは済まない。

俺は冷静に考える。例えば思考が高速で回転し世界のすべてがスロー再生の様にゆっくり動いても、別に時間が遅くなったわけでもボールが遅くなったわけでもないのだ。俺は超能力者ではないのだ。

俺は考える。いくら思考が高速になっても俺自身の体が早く動くわけではないのだ。

今この状態で俺が手足を動かしてもゆっくりと、それこそスロー再生の様にしか動かない。

あくまで思考だけが高速になっただけだ。

「さて、どうするかね」俺は思った。ボールはゆっくりとコチラに向かって飛んでくるが。それ以上に俺の体は動かない。

避けることは造作も無いだろう。幾らボールが高速だといっても、

この高速の思考の中で冷静に体を動かせば大抵のものは躲せる。他の人が避けられないのは思考が追いつかず反応自体が遅れてしまいか。とっさに体を動かせないからだ。

だが俺は、高速の思考の中。最小限の動きでボールを躲せる。

躲すことは簡単だ。だが躲せば俺に当たるはずのボールは俺の後ろに飛んでいき他の人に当たるだろう。

それでは少し後味が悪い。て言うか嫌だ。当たるのは多分名前も知らない奴だが関係ない。

俺はゆっくりとした思考の中ボールを手で受け止めるところにした。

俺は必死で手を動かした。手はゆっくりと動く。ボールはソレよりも早く動く。

俺は必死に手を動かそうとするが、やはりゆっくりだ。

それでも手はゆっくりと動きながらだが、俺の顔の前まで到達し。ボールがたどり着くより早くボールを受け止める構えを取った。

暫くしてボールがゆっくりと近づき、俺は素手で受け止め思いつ切り握り締めると、俺は手を後ろに引いてボールの勢いを殺し、手を守った。

その瞬間高速の世界は溶け、世界は回りだした。

周りからは俺が、高速で飛ぶボールを素手で受け止めた様に見えた。実際そうなんだけどな。

俺は手からボールを落とすと手はビリビリと痛み真っ赤に腫れていた。

高速で思考出来るといっても体は普通の人間だ。飛んできたボールを素手で掴めば痛いに決まっている。・・・「痛え」俺は涙目に成った。

俺はこの力を「反射神経」を超える反射。「走馬灯」に近い現象と

いう意味を込めて

『相馬』と呼んでいる。

何度も言うが。俺は超能力者ではない。

俺はあくまで普通の人間だ。ただ少しだけ頭のリミッターが緩いのだ。

脳は、いつも大部分が休息している状態だ。殆ど動かずに一生を終えている部分もある。

そうしないと、細胞が持たないからだ。

これは同じく、体中の全ての細胞に当てはまることだ。

体中の筋肉が100%動けば、確かに凄い力が引き出せる。

だが、その代償として筋肉はスタボロに成ってしまうだろう。

『相馬』も同じだ、使い過ぎればヒドイ頭痛や吐き気に襲われる。

処理する情報量に脳細胞が持たないのだ。

例えば、他の人が1秒を感じる間に俺は、『相馬』を10倍率で使えば。十秒に感じられる。

その間俺の頭は十倍の情報を目で捉えた映像。耳で聞いた音。肌で触れた触感。が十倍脳みそに負荷を与える。

連続で使える時間は短い。連用も難しい。

さて俺はバッターの打ち損じを超高速で、ソレも素手で受け止めたわけだが。

周りの外野。ボールに反応すら出来ず、動くことすら出来ない普通の人は。驚きと賞賛の嵐になっていた。

俺はこの力を自慢する気も話す気も無い。動けないのが普通で、俺がオカシイだけなのだ。

俺はこの力を疎ましく思っているわけではない。大いに感謝している、この力のお陰で俺は何度も助かってきた。ただ、自慢するような物でもないと思っっている。それだけだ。

俺は野次馬が五月蠅くなってきた所で、手の痛みを理由に保健室に逃げ込んだ。

実際手は赤く腫れている。ボールは素手で掴むものじゃない。ちよつと涙目に成ったし……。

ボールを掴むときに威力を、大分殺したのに結構痛かった。普通の人じゃつたら、指の骨が折れてしまつかもしれないな。この力のお陰で衝撃の威力を殺すのは上手くなった。なんて言っただけで欠伸あくびが出るほど遅いのだし、上手くならないと痛いので自然と身についた。

保健室。。。俺は消毒液の独特の匂いと交流を深めていた。

正直、俺は保健室のお世話になる機会が多い気がする。

相馬ソウマなんて力を持ちながら俺は怪我や生傷が絶えなかった。

何故だろう、普通に考えれば怪我をする機会は減るはずなのだが。俺は何かと厄介ごとに巻き込まれたり。危険が迫ってきたりする。今日もだ、ファールボールが自分目掛けて飛んでくる確率はどの位だろうか。かなり低いに違いない。それなのにボールはまるで吸い込まれるように、俺に向かって飛んできた。

呪われているのだろうか。。。お祓いとか行っただほうが良いのだろうか。

相馬ソウマが無かつたら、もう死んでいるかもしれない俺は。

寧ろ、この力が有るから不幸なことが起きるのだろうか。この力自体呪われていそうだ。。。

そう考えても仕方ないので俺は布団に寝転んだ。

本日は高校1年生春の大球技大会と称した、男女別ソフトボール大会だったが、このまま欠席させて貰おう。

新入生のクラスだけ集められて、ソフトボールで親交を深めようだなんて面倒くさいよ。

そんなに人付き合い好きじゃないしな俺。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2414ba/>

マイ フィールド ~ 並列の境界 ~

2012年1月6日01時48分発行